

民俗学への旅

2. 松本の神々—三峰神社—

市東 真一

松本では、町会には何かしらの社や祠が存在している。先月号では、稻荷社と町の関係について執筆したが、今回は稻荷社と対になる三峯神社のことについて紹介する。三峯神社は、埼玉県秩父市に鎮座する神社で、日本におけるオオカミ（狼）信仰の一大拠点となっている。

三峯神社の歴史は古く、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が東征中、碓氷峠に向かう途中に現在の三峯神社のある山に登って伊弉諾尊（イザナギノミコト）・伊弉册尊（イザナミノミコト）の国造りを偲んで創建したとされている。また、景行天皇の東国巡行の際、白岩山・妙法ヶ岳・雲取山の三山を賞めて「三峯宮」の社号を授与したことから三峰という名が付いたという。その他にも、伊豆国に流罪になった役小角（エンノオヅノ・エンノショウカク、役行者）が三峯山で修行、空海が観音像を安置したとされるなど、数々の伝説が存在している。中世以降は日光系の修験道の道場となり、関東各地の武将の崇敬を受けた。しかし正平七（1352）年、足利氏に社領が奪われて衰退。文亀（1501～1504）年間に修験者の月觀道満がこの廃寺を知り、天文二（1533）年に堂舎を再興させた。以後は、聖護院派天台修験の関東総本山として隆盛。江戸時代には、三峯神社の狼の護符の授与が流行した。修験者らが当社の神徳を説いて回って三峯講が各地に結成される。そして、明治の神仏分離政策により寺院を廃して「三峯神社」に改称され、現在に至っている。

この三峯講は、松本市内の農村から町場にまで存在する。特にオオカ

ミは、火事や災難の元凶とされる野狐などの動物霊を追い払う存在とされていたため、特に都市部に多かった火災や盗難などから守ってくれるということで江戸後期から関東地方を中心に流行した。現在でも松本の農村部では、オカリヤ（御仮屋）と呼称される杉の葉で覆われた祠が存在していて、この祠は、現在長野県内でしか見られないとされている。先月紹介した稻荷社と同様、町内の人びとから信仰される祠となっている。

しかし、三峯神社の眷属であるオオカミは不淨を嫌うとされ、祀る場所は神社の境内など清浄な場所と限定されている。また、狐はオオカミを嫌うということで稻荷神と一緒に祀ることは禁忌とされている。このように、三峯信仰は稻荷信仰よりも複雑な制約が多い。しかし、松本ではこれらの制約はほとんどが忘れ去れているのが現状である。

特に松本で三峯信仰が流行りかつ長く信仰されている要因として、三峯神社へ代参する楽しみが大きな要因であったと考えられる。いずれも、松本の人びとを火事や盗難といった災難から守ってくれたのがこの三峰神社である。

（神奈川大学日本常民文化研究所
特別研究員
松本市在住）

